

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03590

研究課題名(和文) 縄文時代の氏族制社会の成立に関する考古学と集団遺伝学の共同研究

研究課題名(英文) The Archaeological study on the formation of Clan society in Jomon age, the collaborative studies between Archaeology and Genomes Analysis

研究代表者

高橋 龍三郎 (TAKAHASHI, Ryuzaburo)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：80163301

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 31,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は縄文時代中期から後期、晩期への社会変動を、考古学的所見から予想される親族構造、出自制度、婚姻制度などの社会基盤の変動から読み解き、それをゲノム解析、同位体分析、古病理学などの分子レベルの生命科学と連携・融合して明らかにする研究である。千葉市や市原市周辺の貝塚遺跡などに地域を限定し、両分野の研究を進めた。考古学の調査研究では、遺構や遺物分析などに加えて、土器(動物形土製品)や黒曜石などの成分分析から社会変動の動態に関わる交易関係が明らかにされた。また市原市の草刈貝塚(中期)、菊間手永遺跡、祇園原貝塚、西広貝塚(後期・晩期)の人骨分析から遺跡間の親族関係や母系制を暗示するデータが得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、縄文時代の社会変動については殆ど全く解明されてこなかったが、本研究によりその変動が親族構造、出自制度、婚姻制度などの社会基盤の変革と深く結びついていることが解明された。遺跡や遺構、遺物の変化を単なる「物質文化の変化」としてではなく、それを支えた縄文人のゲノム上の変化と重ね合わせ、社会変動の要因を社会基盤の変動から解明した研究は本研究が最初である。祇園原貝塚や西広貝塚などの同時期の近接集落間での婚姻関係や出自制度の変革を以前よりも精密な方法で解析した。後期に当該地域では「母系制」の単系出自社会(氏族制)が成立した可能性を考古学、分子生物学の両面から予測し得たことの学術的意義は大変大きい。

研究成果の概要(英文)：This research project is characteristic in that the collaboration between archaeological studies and molecular biology such as genome analysis and isotopic analysis of Jomon people are expected to explore the grand social transformation from Middle Jomon age to Late and Latest Jomon age in North-eastern Japan. The project collaboration for 4 years has revealed many interesting archaeological evidence to reconstruct the social base transformation that include social structure, descent system, marriage system in Jomon age. Totally over 100 individual human bones which were excavated in Jomon shell mound sites around Chiba city and Ichihara city in Chiba prefecture were analyzed by DNA and isotopic analysis. One of the important facts so far detailed mtDNA analysis has suggested is the establishment of unilineal descent of Matrilineal system of at the Late Jomon age in those area.

研究分野：考古学

キーワード：氏族制社会 環状集落 母系制 ゲノム解析 同位体分析 蛍光X線分析 古病理学 トーテムズム

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

縄文時代中期に東日本に広く展開する環状集落は、中央に広場を囲みその周囲に竪穴住居が100~200軒めぐる特殊な形状を呈するため、居住規模においてそれまでの縄文文化・社会が最も発展した形態とみなされてきた。それゆえに気候環境に恵まれて狩猟・採集活動が豊かな文化社会を育んだと見なされ、文化の繁栄の象徴とみなされてきた。一方、縄文時代後・晩期を迎えると、一転して集落は分散化して小規模化し、しかも元の環状集落に留まる住居はなくなることから、中期末で環状集落は解体し、後期には小人口・小規模集落へと向かったことが推察されてきた。その要因として生態学的見地から気候環境の悪化に注目し、自然環境への対応が変化し、生業活動などの変動が引き起こされたことが推察された。この課題は、既に1970年代から縄文時代考古学の枢要な課題に掲げられ多角的な検討がなされたが、未だに結論は得られていない。大方の支持を得たのは、繁栄期の中期文化が環境変動によって衰退し停滞的な後期文化を生み出したという仮説であった。その視点では、後・晩期に格段に増加する土偶・土版・石棒・土面などの儀礼・祭祀的な遺物や環状列石、土盛り遺構、配石遺構のような儀礼・祭祀的なモノメントは、生産性が低下して不安定で停滞的な文化・社会を象徴すると考えられていた。この時代の文化変動の理解は、生業などの経済的側面や文化的側面に注目したもので、社会基盤としての親族構造や出自、婚姻システムなどの深層に着目したものではなかった。

そのような経済的視点、唯物史観が優勢の1990年代に、それらの視点を大きく揺るがず出来事が2件あった。

(1)茨城県竜ヶ崎市の中妻貝塚(後期)出土の再葬土墳墓から出土した人骨群のゲノム解析が行われ、篠田謙一氏らによるmtDNA分析の結果、人骨群が単系出自の母系制社会を構成していた可能性が高いことが示された。停滞的で生産性の低いと目された縄文後期社会が既に社会進化を遂げていることに考古学者は大きな衝撃を受けた。社会の複雑化、階層化過程が相当に進展し、縄文中期よりも一層進化した社会状況であったことを示しており、ここに従来の学説の見直しを図る必要が生じた。特に、社会基盤の検討なしに、縄文後・晩期を呪術や儀礼などの支配する停滞的社会とみなしてきた学史に大きな反省が寄せられた。

(2)欧米の研究では、社会進化を論じる仮説に大きな潮流が現れ、従来の経済中心史観から脱却が図られている。文化社会の変動の要因として経済的要因よりも、むしろそれを促す直接的要因の解明が重要課題として把握されるようになってきた。特にカナダ、サイモンフレーザー大学のブライアン・ヘイデン教授の提唱による「祭宴説」は多くの民族誌に支えられた学説で、1人のリーダーが析出する社会進化過程の背景を社会の複雑化と階層化過程から解き明かす学説で、一般に“Transegalitarian Theory”と呼ばれ多くの支持者を集めている。先祖祭祀や人生儀礼に関わる様々な祭祀・儀礼を執り行う過程で、より多くの食料や物品を生産する必要が生じるという仮説で、その過程で社会が複雑化、階層化するという理論である。従来の学説の原因と結果を逆転する発想である。そうすると縄文時代後・晩期に先祖祭祀や多くの祭祀、儀礼が登場することは、従来言われたような停滞社会の呪術性や社会的衰退理論のシナリオでは解明できないことになる。ここに従来の学説を再検討する必要が生じた。

上記の2つの大きな学史上の契機により、縄文時代中期から後期社会への変動を根本的に見直す必要が生じた。後・晩期社会は決して呪術などが支配する停滞社会ではなく、むしろ弥生時代、古墳時代の首長制社会の社会基盤である氏族制(Clan system)を生み出した社会として認識する必要が出てきたのである。代表者の高橋らは、その理論である親族構造、出自原理、婚姻制などとの関わりにおいて後期、晩期の考古資料の再検討を行い、土偶・土版・動物形土製品・石棒などの再吟味を実施し始めた。特に動物形土製品の研究では、無数に生息した縄文時代の動物種の中で、イノシシ、トリ、イヌ、クマ、サル、巻貝の6種だけが動物形土製品に形作られ、しかも、それらが埋葬や食餌において人と同じ扱いを受けるなど、特別な在り方が注目された。それらの動物形土製品は東日本を中心に分布し、しかも一つの遺跡から出土する動物種は一種に限られるという規則性を持っている。これは集団ごとに決めた動物種が1種であり、それ以外の動物種とは関わりを持たないことを意味している。それらの動物種はその集団にとっては象徴的動物で、粘土で焼かれて動物形土製品になり、ある時には人と同じ食餌を与えられて飼育され、時には供犠されて殺される命運をもっていた。それらは社会人類学的にはトーテミズムである。氏族制社会によく見る制度で、それにより同氏族間の団結を鼓舞する一方で、自身以外の集団と婚姻を取り結ぶ外婚制の指標となるのである。高橋は縄文時代の後期になって登場する動物形土製品の分析から氏族制社会が誕生した証拠と捉え、mtDNA分析の成果と一致することを述べていた。またそれらの動物形土製品が大型住居などの先祖祭祀の場から出土することから、先祖との血縁系譜を重要視する氏族制との関わりを論じていた。

2. 研究の目的

本研究では、中期環状集落の解体から後期社会の成立に至る社会の大変動を社会基盤の問題から捉えなおし、親族構造や出自、婚姻制度などの変動の実態を明らかにするために、考古学検討に加えてゲノム解析、同位体分析、古病理学の調査研究を推進する。

考古学的検討では、中期の環状集落の構成原理(親族構造、出自、婚姻制度)が解体した後・晩期の単系出自社会がどのように誕生するかを遺物、遺構の両面から追跡する。また墓制の検討からそれを補うことを目的とする。特に大型住居の登場や先祖祭祀の強化、祭祀・儀礼用の遺物

の発達について明らかにする。また原産地の明らかな黒曜石などの流過程を解明して、中期から後期への変遷を明らかにし、その違いを社会基盤の違いから解明する。

ゲノム解析や同位体分析、古病理学研究からは、中期環状集落の居住集団がどのような構成を持つ集団であるのか、また当時の婚姻制度の在り方を DNA 情報に基づいて解明する。モデルとして構築した双分制の在り方（半族制）、双系制出自の在り方が正しく DNA 分析で解明できるのかを明らかにする。また同様に後期の集団がどのような社会基盤を持つ集団に変化したのかをゲノム解析、同位体分析などを通じて解明する。墓域から検出される人骨群が、すべてその遺跡で生まれ育った人とは限らず、遠方より婚姻を通じて婚入している可能性もあるので、それらの実態を同位体分析（食性分析）により解明する。

環状集落の解体要因が、実は気候環境の変動による自然環境の悪化ではなく、むしろ限定交換に端を発する婚姻制度の破綻が大きな影響を与える可能性が高いので、古病理学的な検討を通じて、数世代にわたる限定交換の悪弊がどのような遺伝学的な疾病をもたらすのかを古病理学から検討する。

3. 研究の方法

中期の環状集落の構成原理を明らかにするうえで、埋葬人骨が象徴的に身に付けている「鹿角製腰飾り」や「イノシシ牙製腕輪」、「イルカ顎骨製腰飾り」などの集団出自を指し示す装身具が、集団の集落占有の構成方法を示すと考えられるので、環状集落内での出土分布の様相を探る。ことに廃屋墓に埋葬される人骨に装着される事例として市原市草刈貝塚、船橋市高根木戸貝塚、千葉市有吉南貝塚などがあり、それらの出土の仕方から、集団の環状集落内での在り方を明らかにする。草刈集落では環状集落が中央に引かれる「中央分離線」によって環状集落が南北に2分されることが判明しており、双分的なあり方が注目されるが、北側半分には「鹿角製腰飾り」を装着した人々が埋葬されており、南半分には「イノシシ牙製腕輪」を装着した人々が埋葬されていたことから解るように、環状集落の南北で出自の異なる2つの集団が対峙して生活していたことが予測されている。また彼らは環状集落の広場を挟んで対辺の住居群と配偶者を交換する限定交換をしていた可能性が高いので、廃屋墓（具体的には草刈集落202号廃屋墓、228号廃屋墓、516号廃屋墓）の人骨をゲノム解析することによって、半族の血縁的系譜と婚姻の実態を明らかにする計画である。

後期に氏族制が登場したことを考古学的に証明するには、墓制の検討や遺物の綿密な検討を必要とする。特に墓制研究では、小型土坑に人骨を集合して再葬する再葬土坑墓の検討をする。千葉県内では市原市祇園原貝塚の土坑、市川市権現原貝塚、松戸市竹ノ内遺跡、茂原市下太田貝塚の再葬土坑墓が知られており、それらの検討を通じて、単系出自（母系制）が成立するまでの社会変動を遺物、遺構から探る。そのためには動物形土製品の成立過程を明らかにし、動物形土製品の胎土が通常の土器とどのように異なるのかを明らかにし、出自集団ごとに土器とは異なる粘土で動物形土製品を製作したことを明らかにする。これは集団ごとにトーテムとして尊重した動物に対して、縄文人の集団がどのような敬意を抱いていたかを探るためである。

後期の社会集団が単系出自制の社会であることをゲノム解析から明らかにする。そのためには再葬土坑墓や墓域にまとまって埋葬された集団の人骨をゲノム解析し、個体間の関係性を明らかにする。特に後期を迎えると廃屋墓は廃れ、土坑墓や集団墓などにまとまった状態で遺体が埋葬されるので、それらのまとまりの単位ごとに血縁関係を明らかにし、氏族集団の構成を解明する。そのために千葉県市原市に所在する後期の西広貝塚、祇園原貝塚、菊間手永遺跡の人骨につきゲノム解析を行い、同一の遺跡内の構成、異なる遺跡間のゲノム構成を解明する。

4. 研究成果

縄文社会の変動を考古学的に明らかにしてシナリオを描きだし、一方においてゲノム解析や同位体分析、古病理学的手法によって裏付ける研究法は、順調に進展し縄文中期から後期への大変動の一端が明らかにされた。それは次のような点において解明され、あるいは解明されつつある。

(1)

考古学的情報は遺物、遺構の両面から集約され、後期の氏族制の成立に関わる事実の集積が進んだ。そのうち、動物形土製品の胎土について蛍光X線分析の結果、土器等とは全く異なる胎土が用いられて製作されていることが判明した。これは動物形土製品を特別の配慮をもって製作したことを示すもので、その動物をトーテムと仰ぐ集団がそのような特別の配慮をしたことが推察された。動物形土製品は、同じ焼き物であっても一般の土器とは明確に区別して製作されたもので、トーテム動物を特別視する集団の宗教的な対応を見ることができる。

(2)

後期のトーテム制度が成立する直前に、中期の土器に付された動物形象突起などの系譜が大きな意味を持っていることが推察された。それらの動物には後期に継承されたもの（イノシシ、トリ）と、中期で断絶した動物（ヘビ）があり、それらの断絶と継承は人間集団の再編成に関わり、後期の単系出自集団の成立に最終的に集約されていくことが推察された。中期の動物形象突起は後期の動物形土製品に至る過渡的様相と見做され、「プロト・トーテミズム」と称する状況を経ることによって成立することが推察された。

(3)

後期の黒曜石の原産地推定法に基づく流通分析では、信州産、高原山産などの流通過程に中期と後期では大きな差異があり、後期の流通過程には氏族制と関わる氏族ごとに特性が反映していることが明らかになった。

(4)

後期人骨については市原市の西広貝塚、祇園原貝塚、菊間手永遺跡の人骨群、合計 60 検体を mtDNA 分析した。その結果、マップ率が 0.4 とか 0.5 を超える高い数値を出す事例が多くあり、DNA の残存率が極めて高いことが明らかになった。高い残存 DNA 率を示した 13 検体について、NovaSeq (Illumina 社) によるディープ・シーケンシングをおこなった。現在、この出力データ(核ゲノムおよびミトコンドリアゲノムの配列データ)の *in silico* 解析を進めており、ミトコンドリアゲノムについては、13 検体の全てについて高精度の完全ゲノム配列を得ることができた。これら配列データにもとづき、集団遺伝学解析および出土人骨間の遺伝的関係を分析した。

(5)

後期人骨群の mtDNA 分析では HV 領域の全般にわたって解析が進み、D ループだけではなく、ほぼ全領域の構成が明らかにされた。その結果、西広貝塚で近接して出土した 2 体の人骨(7-2 人骨, 7-3 人骨)は同じ mtDNA を共有しており、年齢的な考察を踏まえると「母親とその娘」という可能性が高まり、人骨の出土様態から判断すると母系に繋がる埋葬法であることが推察された。

(6)

西広貝塚の 7-2 人骨、7-3 人骨のような 2 体が一對となって近接して埋葬される人骨群が後期の小作貝塚や祇園原貝塚に顕著に発見されるが、それ等はともに母系血縁に基づく埋葬法の可能性があることが推察された。後期の埋葬人骨の位置づけを検討するうえで大変重要な指標となることが予測された。

(7)

今日的な細密な分析法に徴して、1990 年代になされた旧式の分析法を再検討すると、同じ配列と見做された mtDNA データから「母系制」と断定された内容には若干問題点があることが判明した。それらを科学的に証明するにはやはり核 DNA の塩基配列情報が必要であることが明らかになった。やはり mtDNA 情報は 200 文字ほどの少ない配列から明らかにされたもので、全体として限界があることが示された。

(8)

詳細な mtDNA 分析により、西広貝塚、祇園原貝塚、菊間手永遺跡などの人骨の個体間には、血縁関係において強い関連が認められるものが確かに存在し、縄文時代のほぼ同時期に同じ mtDNA を共有する母子関係や婚姻関係があることが判った。それらは精密な年代測定により、異なる時代の人骨も含まれるので、遺跡における出現の時期についても精密な判定を行う必要があることが理解された。

(9)

イヌをトーテムとする西広貝塚の住民とイノシシをトーテムとする菊間手永遺跡、祇園原貝塚の住民間で婚姻を通じて遺伝子上、人々の強い関連性が窺われた。これは外婚制に基づく婚姻の結果の可能性もある。

(10)

縄文中期の草刈貝塚の廃屋墓に由来する人骨群の DNA 解析は現在継続中である。そのために廃屋墓間の人的な血縁関係、中期と後期の血縁関係のつながりについてはこれから明らかにする予定である。両者の結果を熟考して判断することにする。今回の解析に用いたのは中期の草刈貝塚、後期の西広貝塚、祇園原貝塚、菊間手永遺跡の人骨群で、同じ市原市内に所在する遺跡に由来する。同じ地域内で、時期を違えてどのような変動があったのかを解明するうえで重要なセッティングである。

(11)

市原市の後期 3 遺跡人骨について古病理学的見地から検討したが、現在までに近親婚などの婚姻制度に起因する遺伝学的な疾病や病変については検出されていない。ただ、矢作貝塚などの後期貝塚で注目された口蓋裂傷の遺伝的特性については今後も検討を続ける必要がある。

以上のように縄文中期から後・晩期への社会変動について、考古学とゲノム解析の共同研究により、多くの事実が解明され集積されつつある。考古学的には人生儀礼や先祖祭祀を中核に、祭祀・儀礼的な特性を強めていく過程が明らかにされ、その時期が丁度中期末の双系制社会から後期の単系出自社会への変動期にあたり、社会がトーテミズムの色彩を強めていく過程と重なることが明確に把握されてきた。特に単系出自社会の出現は、社会の複雑化過程に大きな前進があったことを示しており、氏族制による分節構造が後期になって社会の重要な組織建ての根本となったことを示している。氏族制は後代の弥生時代、古墳時代の社会の組織原理であり、首長制社会に必要な社会基盤である。その社会基盤がすでに縄文時代後・晩期に整備されていたことが予測されたわけである。この見解は従来の学説に大きな変更を迫るものであり、今回の大きな成果といってよい。西広貝塚や祇園原貝塚に顕著に出現する2体一対の女性埋葬形態で、それが母親とその娘という図式がmtDNA分析の結果、西広貝塚で示されたことは大きな意義を持つ。母系的な繋がりで埋葬されたことを示すもので、間接的に母系制社会を示唆することになる。今後の研究指針として重要な手掛かりを提供した。多数遺跡間にわたり検討を続けることで、この時期の埋葬原理を明らかにすることができると考えられる。

今後の研究で、母系制の科学的な証明にはなお多くの分析が必要であり、核DNA情報が不可欠である。幸いなことに市原市周辺部の遺跡から出土した人骨群はマップ率が高く、DNAの残存状態が良好であることが判っているので、ディープ・シーケンシングにより、ゲノム情報に関して多くの事実が解明されると期待される。

考古学的に描いた中期から後期への社会変動モデルについては、基本的に大きな過誤はなく、トーテミズムの出現を単系出自社会の発生とみなす社会原理とすることに特段の矛盾点はなかった。それを考古学的に抽出できたことは従来の研究には全くなかった視点で、市原市の後期貝塚人骨例のゲノム解析の成果と重ね合わせると矛盾なく統合的に理解される。

考古学的に市原市の3遺跡(西広貝塚、祇園原貝塚、菊間手永遺跡)を分析すると、氏族の異同が把握される。蛍光X線分析で黒曜石などの物流を検討すると、氏族単位で異なる対応をしていたことが理解される。蛍光X線分析による動物形土製品の胎土分析では、肉眼では識別できなかった胎土の違いが明確に区別された。それは通常の土器を製作する粘土とは異なる粘土を用いたことを示しており、その動物を氏族のトーテムと仰ぐ集団の旗印にも似て、特段の注意と配慮をもって製作されたことを示している。同じ動物種の胎土が、異なる遺跡においても証明されれば、遺跡(集落)が異なっても同じ氏族においては共通の動物形土製品が製作・分有されたことを示すと考えられ、同じ氏族間の強い連帯を示すことになるが、それは今後の課題である。

後期のトーテミズムは、後期を迎えて突然成立するのではなく、それ以前の中期後半期にそれにつながる前段階の動きがあり、中期の動物造形につながると予測される。ヘビやイノシシ、トリなどの動物造形が中期の土器に装飾されるが、それらの変遷の後に後期の動物形土製品が出現すると考えれば、その前段階はいわば「プロト・トーテミズム」の段階である。それらの実態については今回の研究では解明できなかったが、今後の課題として位置付けたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 巻 全1冊 |
| 2. 論文標題 未開社会における耳飾りの民族誌 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『桑野遺跡』あわら市埋蔵文化財調査報告第3集 | 6. 最初と最後の頁 212,218 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 巻 全1冊 |
| 2. 論文標題 未開社会における耳飾りの民族誌 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『桑野遺跡から見た縄文世界』 | 6. 最初と最後の頁 83,85 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 巻 全1冊 |
| 2. 論文標題 縄文時代の土器生産と權威の発生 氏族社会の民族誌から見た土器型式の成立と流通 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『権力とは何かー生産と流通から考えるー』岡山大学第65回総会・研究集会講演会 予稿集 | 6. 最初と最後の頁 1,10 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 巻 第66巻第3号 |
| 2. 論文標題 縄文時代の土器生産と權威の発生 氏族社会の民族誌から見た土器型式の成立と流通 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『考古学研究』 | 6. 最初と最後の頁 23,35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 巻 特別号 |
| 2. 論文標題 縄文中期社会と諏訪野遺跡 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『平成27年度ほるとま考古学セミナー特別講演録』 | 6. 最初と最後の頁 73,100 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎・佐藤亮太・比留間絢香・隈元道厚 | 4. 巻 第182冊 |
| 2. 論文標題 パプアニューギニアにおける民族考古学的研究 (16) | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『史観』 | 6. 最初と最後の頁 134,159 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 巻 482 |
| 2. 論文標題 近年の考古学が描き出す縄文社会像 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 月間 日本教育 11月号 | 6. 最初と最後の頁 8, 11 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎・竹野内恵太・井上早季・佐藤亮太・比留間絢香・石井友菜 | 4. 巻 第64輯 |
| 2. 論文標題 第1・2次加曾利貝塚三次元測量・地中レーダー探査調査概報 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学区研究科紀要 | 6. 最初と最後の頁 80,105 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 民族誌から見た土器文様の機能と製作者の精神世界 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 浅間縄文ミュージアム 異形の造形 釣手土器と有孔罽付土器 | 6. 最初と最後の頁 18,23 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 1件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 未開社会における耳飾の民族誌 |
| 3. 学会等名 桑野遺跡シンポジウム『桑野遺跡から見た縄文世界』福井県あわら市教育委員会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 縄文時代の土器生産と権威の発生 氏族社会の民族誌から見た土器型式の成立と流通 |
| 3. 学会等名 『権力とは何かー生産と流通から考えるー』岡山大学第65回総会・研究集会記念講演会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 縄文社会の氏族制の成立に関する研究と課題 |
| 3. 学会等名 早稲田大学考古学会2019年度総会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 縄文社会研究にはたす山梨県遺跡の役割 氏族制社会の成立に向けた中期の歩み |
| 3. 学会等名 山梨県立考古博物館講演会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 これからの縄文考古学と山梨県遺跡」 |
| 3. 学会等名 『早稲田大学地域交流フォーラム in 山梨』（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 石器石材採掘坑の出現に関する比較と民族誌 |
| 3. 学会等名 『岡谷縄文シンポジウム』9月28日 岡谷市立美術考古館主催（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 縄文時代の土器工芸の発達を社会背景から考える |
| 3. 学会等名 第37回企画展「縄文文化の頂点」展講演会山 梨県立考古博物館（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 エリ穴遺跡と縄文後晩期の社会 近隣諸県との比較から |
| 3. 学会等名 松本市教育委員会 エリ穴遺跡重要文化財指定記念講演会（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Takahashi Ryuzaburo |
| 2. 発表標題 Archaeological Indicators of the Emergence of Clan system in Late phase of Jomon Period |
| 3. 学会等名 The International Symposium on Japanese Prehistory, Cambridge University, East Anglia University, Waseda University, Akita International University (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 高橋龍三郎 |
| 2. 発表標題 民族誌から見た土器文様の機能と製作者の精神世界 |
| 3. 学会等名 浅間縄文ミュージアム 『異形の造形 釣手土器と有孔罎付土器』シンポジウム（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 山梨県立考古博物館 | 5. 総ページ数 75 |
| 3. 書名 「縄文土器工芸の発達を社会背景から考える」『縄文文化の頂点』第37回特別展カタログ | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 高橋龍三郎 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 世界の民族誌を学ぶことで、縄文時代の何が見えてくるのか？ | 5. 総ページ数 112 |
| 3. 書名 日本人の起源 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| <p>縄文時代における氏族制社会の成立に関する考古学と集団遺伝学の共同研究 https://w3.waseda.jp/prj-jomonjidai/results/results-takahashi/</p> |
|--|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---------------------------------------|---------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 米田 穰 (YONEDA Minoru) (30280712) | 東京大学・総合研究博物館・教授 (12601) | |
| 研究分担者 | 藤田 尚 (FUJITA Hisasi) (40278007) | 同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員 (34310) | |
| 研究分担者 | 太田 博樹 (OHTA Hiroki) (40401228) | 東京大学・大学院理学系研究科(理学部)・教授 (12601) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------------------|---|---|----|
| 研究 分 担 者 | 池谷 信之 (IKEYA Nobuyuki) (80596106) | 明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・特任教授 (32682) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |